

Guest Forum
特集寄稿

DRG/PPS などの包括的医療と臨床検査
Medical Payment System (DRG/PPS) and Clinical Laboratory Practice

最近 医療を取り巻く環境は非常に厳しくなっており、例えば臨床検査の保険点数はいわゆる“まるめ”などの包括化が行われている。さらに、今後は疾患ごとに医療費を包括化するDRG/PPSなどの方策も考えられており、臨床検査領域に従事している者にとっては厳しい状況にある。

DRGとはDiagnosis Related Groupの略であり、診断に応じたグループ分けの意味である。これは従来あった国際疾病分類1万以上の病名を500程度の病名グループに整理したものである。このような病名分類の簡素化は米国を中心になされているが、これは本来診療や医学のためでなく、いわゆる病院マネジメントの手法の一つとして普及してきている。

一方、PPSとはProspective Payment Systemの略で包括支払方法の事である。したがって、DRG/PPSというのは診断群別包括支払と訳されている。つまり、一つの疾患群ごとに一定の医療費が設定され、どのような検査、治療をしてもその患者が病院などの医療機関に支払う額が決まっているシステムである。これにより、診療報酬を科学的に算出する事ができ、医療費の無駄を省いて医療経営に資するデータを作る事が可能となるのである。

しかし、このままDRG/PPSなどの包括化の保険制度が制定されると、どのような臨床検査をしても一定の金額しか医療機関に支払われないため、差益をとるために過小検査が行なわれる可能性が出てくる。そして、それが患者にとって粗診粗療の原因になる事が十分考えられる。

言うまでもなく、患者に良質の医療を施す事は非常に重要であり、いくら医療費の節約が必要と言ってもこのような粗診粗療はあってはならない医療行為である。医療費の削減と良質な医療の確保、この狭間にあつて臨床検査関連の従事者も大変困難な時代を迎えている。

この困難な状況を乗り切るには臨床検査をいかに医療上効率的に行い、かついかに経済効率をあげるかが最大の課題となっており、そのための検査指針の作成が急がれている。

日本臨床病理学会では平成元年より「日常初期診療における臨床検査使い方小委員会」を設置し、大きな努力により指針となる臨床検査の使い方ガイドラインの小冊子を作成し、どのような基本検査が初期診療に必要なかを示してきた。

また、一昨年、旧委員会が発展的に解散し新委員会が発足し、旧委員会の意向を継続すると共に、時代のニーズに応える保険診療を意識した実践的な検査の使い方ガイドラインを作成する事になった。昨年4月に9疾患群についての「DRG/PPSに対応した臨床検査のガイドライン」が発刊され、新たな臨床検査の使い方指針が作成



渡辺 清明
Kiyooki Watanabe, MD

慶應義塾大学医学部
中央臨床検査部
教授 医学博士

されようとしている。なお、本ガイドラインは最終的なものでなく、あくまで第一次案であり、今後、臨床病理学会、DRG/PPS指定病院、日本医師会、その他関連学会の先生方のご意見を十分取り入れて、evidence basedの形で逐次完全なものにしようとするものである。たまたま私自身がこの委員会のまとめ役を仰せつかっているので、是非関連各位にご一読して頂き、忌憚のない意見をお聞かせ頂き、「臨床検査ガイドライン」の最終作成にご協力頂ければと思っている。

話は変わるが、先述の臨床病理学会の「日常初期診療における臨床検査の使い方、基本的検査」によると、どのような施設でも行える基本的検査として以下の7項目の検査が挙げられている。

一般状態：総蛋白量（TP）、A/G比およびヘモグロビン（Hb）の3項目で一般状態を把握する。この3項目すべて正常なら一般状態は良好である。また、例えばこの3項目がいずれも低下していれば一般状態は重症であるなどの判断を下す。

感染症の有無：これは白血球数、CRPで判断する。両者高値なら細菌感染症を疑う。

貧血の有無：ヘモグロビン、ヘマトクリットおよび赤血球数で判断する。

腎障害の有無：尿蛋白、潜血などから判断する。

肝・胆道系障害の有無：尿ウロビリノゲン増加と尿ビリルビンが陽性なら肝・胆道疾患を疑う。

糖尿病の有無：尿糖の有無で判断する。

胃腸障害の有無：便潜血の有無でスクリーニングする。

この基本操作が臨床的に妥当か否かは未だ確証がない。ただ、初期患者500例の検討ではこれらの検査が異常となる確率は平均すると10-20%程度であり、かなり陽性になるように思われる。したがって、今のところこれらの基本検査が診療所などで行う事は妥当と考えられる。

堀場製作所では、現在ヘモグロビン、ヘマトクリット、赤血球数、白血球数、白血球百分率、CRPを簡易に測定できる装置を販売しているが、これらはそういう意味では時代にあった検査機器といえる。したがって、今後さらに上記ニーズに応える基本機器を開発をして頂きたいと思う。

いずれにしても、医療費抑制のための包括化医療制度の中でわれわれ臨床検査が繁栄するには業界あげての努力が必要であるので、是非その旨ご協力をいただきたいと思う次第である。